

## ジョン・エヴァレット・ミレイの 1860 年代の対作品における

## 視覚的相互作用とその展開

古賀 詩織 (九州大学)

本発表の目的は、ジョン・エヴァレット・ミレイ (Sir John Everett Millais, 1829-96 年) の対作品における構成の違いに着目し、19 世紀のイギリスの鑑賞者にもたらされた視覚的相互作用の差異とその意味を明らかにすることである。

ミレイの対作品である《わたしのはじめての説教》(1863 年) と《わたしの二回目の説教》(1864 年) (以下、《説教》の二作品) は、それぞれ 1863 年と 1864 年のロイヤル・アカデミー展に順番に出品された。パメラ・フレッチャー (2018) は、これらが同じ空間での展示を前提とした対作品の構成とは異なる視覚体験をもたらすと指摘し、物語的な連作との関連を示唆した。しかしながら、これまでヴィクトリア朝時代の対作品を包括的に扱った研究はほとんどなく、その形式的特徴や制作意図に関する分析は不十分である。また、こうした対作品の構成の違いが、ヴィクトリア朝時代の視覚体験にもたらす差異については、具体的な作例に基づく検討の余地が残されている。

本発表では、イケモト・ウェンディ (2017) による対作品の定義を参照しつつ、ミレイによる 9 組の対作品の類型を整理する。そのうえで、《説教》の二作品と、その 3 年後である 1867 年のロイヤル・アカデミー展に同時出品された《目覚め》と《眠り》を比較分析の対象として取り上げる。両作品群は、目を見開いた子どもと眠る子どもの姿が描かれる点で共通している。《説教》の二作品については、公開後の美術批評や版画製作の実態から、これまで指摘されてきた時系列的な解釈だけでなく、新たに二枚が対であることを前提とした遡及的な解釈とその関係性を考察する。一方で、《目覚め》と《眠り》は、同時代の展覧会評や書簡から、同じ部屋に展示され、対として鑑賞されたことが分かる。本発表では、その制作背景と画面構成を分析し、描かれた子どもの視線や花などの象徴的なモチーフが二つの画面の間に循環する視覚的構造をもたらすことで、二枚の絵が共有する象徴的意味が示されることを指摘する。

以上の分析から、時間軸と対照性によって結びつく《説教》の二作品は直線的な視覚的相互作用を、画面間で構図と象徴的モチーフが呼応する《目覚め》と《眠り》は二枚の絵の間に循環する視覚的相互作用をもたらすことを明らかにする。さらに、絵画の物語性を重視し、版画による複製イメージが普及したヴィクトリア朝時代の文化的背景のもとで、ミレイの対作品が時間軸の単一的な流れの表現を超えて、二つの画面の間に多層的な意味を生み出す絵画世界へと展開したことを示す。

《目覚め》と《眠り》はこれまで、《説教》の二作品の成功を踏襲した対作品として理解されてきた。しかし、本発表の考察からミレイの対作品の展開を示すことで、ヴィクトリア朝時代における対作品の受容の様相を明らかにするとともに、ミレイ研究に新たな視座を提示したい。